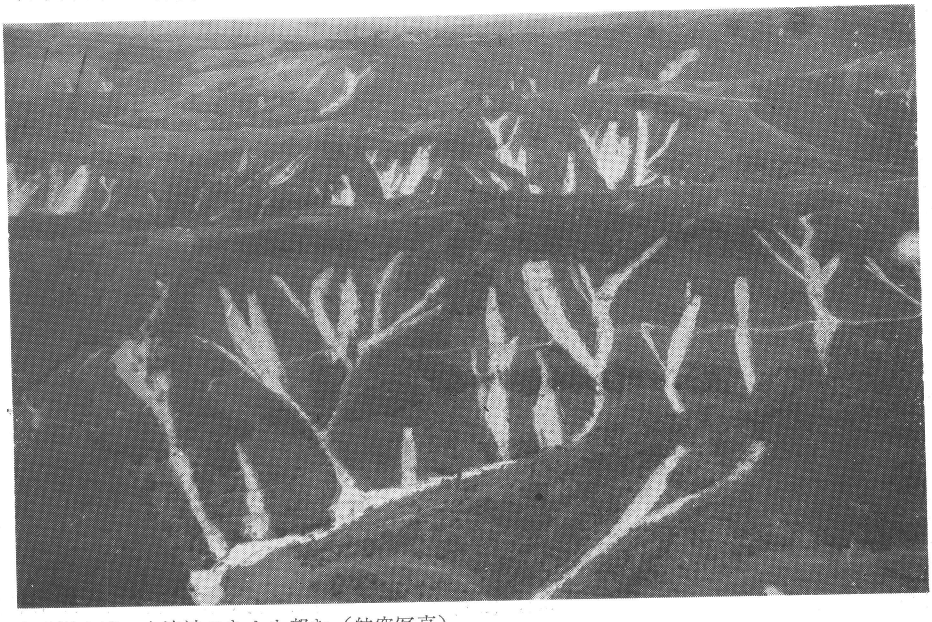
本明川はんらんの跡
諫早市はそのむかし「流れ町」といわれるほど，大きい水害を経験した。いつ来てみても橋のかかっていないのを見た幕府の巡察使が流れない橋を作ることを命じ，石で橋を作ったものが眼鏡橋（写真の手前のもの）である。今回これは流失しなかったが，これがかえって仇をなし，流木が橋にかかって流れをせきとめたため両側にはんらんし多数の死者や流失家屋を出した。
（写真中川上は右下）　（毎日新聞社提供）

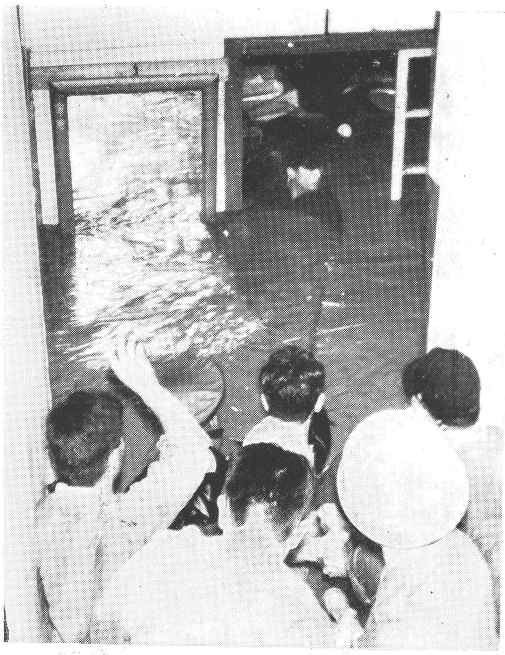


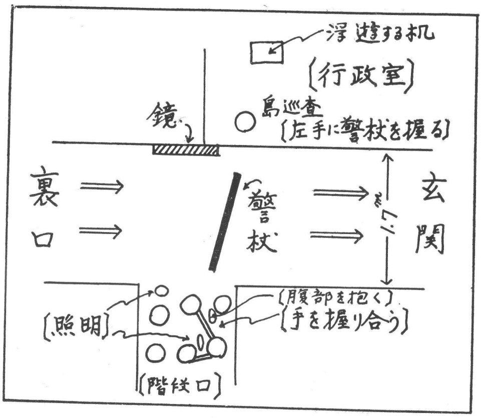
本明川上流の山津浪のあとを望む（航空写真）
本明川上流の二つの支流，すなわち湯野尾川および富川渓谷には至る処に山津浪のあとがあり，湯野尾川上流だけでも150カ所の山津浪のあとがあるといわれる。山津浪による人家の流失，山林田畑の岩石による埋没などその惨害は著しい　（長崎民友新聞社提供）

写　真　1　大村市の北方を流れる郡川堤防破壊状況

写　真　2　国鉄大村線岩松駅付近，道床が流されてしまった

写　真　3　大村市大村駅付近





【写真説明】　　　　　（長崎日日新聞社提供）

取残された署員の救出

諫早警察署では裏口より浸水した濁流が25日22時15分より15分間に廊下面より15m急上昇し，その水勢は行政室から幅1.7mの廊下を横切って階段口に行けぬほどの急流であった。

この急激な増水により停電中の全市内では阿鼻叫喚の大惨事が発生し，同署でも危険に直面した階下の署員を緊急に救出すべく懐中電燈の照明をたよりに，急流に流されぬよう手を握り合った階段口の署員から行政室の柱につかまった島巡査に警杖（長さ1.3m）が渡された。

かくて署長以下11名と記者3名はつぎつぎに行政室の窓に昇り島巡査が左手に持つ警杖に足をかけ濁流の上を階段口に飛び，かろうじて救出された。その後同署の浸水は 3m20に達している。